列藩騒動録（下）

海音寺潮五郎

列藩騒動録(下)
海音寺潮五郎
© Kaionji Chogoro Kinenkan 1976
昭和51年2月15日第1刷発行
昭和62年2月5日第17刷発行

発行者——野間惟道
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112
電話 東京(03)945-1111(大代表)
Printed in Japan

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義
製版——株式会社まゆら美研
印刷——豊国印刷株式会社
製本——株式会社若林製本工場

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えします。 (庫一)

ISBN4-06-131326-6 (1)

講談社文庫

列藩騒動録
(下)

海音寺潮五郎

講談社

目次

仙石騒動　七
生駒騒動　六六
檜山騒動　一二八
宇都宮騒動　一九八
阿波騒動　二四九
解説　尾崎秀樹　三一〇
年譜　三二八

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

列藩騒動録

(下)

仙石騒動

一

但馬（兵庫県）出石の仙石家は権兵衛秀久の後である。権兵衛は美濃の人、驍勇をもって名があり、しきりに武功を積んで、豊臣秀吉に愛せられた。秀吉の九州征伐の時、長曾我部元親、十河存保らの四国大名らが先発隊となって豊後に向い、権兵衛はその軍目付となって行ったのだが、はからずも大味噌をつけてしまった。

先発隊は豊後に上陸すると、薩摩方に帰属している城々を鎮圧したりなどしていたが、そのうち薩摩勢が北上して来て、臼杵近くの利光城にとりかけ、城の危ういこと累卵のようであるとの報告が入った。

元気者の権兵衛は、すぐ行き向って有無の一戦を遂げようと言い出した。長曾我部元親も、十河存保も、

「それはようござらぬ。間もなく本軍がまいる故、それを待つがよろしい。聊爾なことをしてはならぬと、関白殿下もくれぐれも仰せられている」

と、反対したが、権兵衛はきかず、
「敵は利光城を攻め立て、城衆は必死の血戦をつづけている。見すぐしにしては男とは申せぬ。貴殿方同意なくば、拙者の一手をもって後詰いたす」
と言い張る。
軍監自身がこうなのだから、長曾我部も十河もしようがない。ついに総勢利光城の救援に行くことになって、戸次川に到着した。
薩摩軍はこれを知ると、利光城の囲みを解いて退却した。
権兵衛は意気昂揚して主張する。
「さては、薩摩人共、臆病風に吹かれたぞ。戦さは機に乗ずるをよしとする。川を渡って追い駆けよう」
「それはよろしくござらぬ。当地の地勢は守るにはまことによい地勢。ここを守って弱を示し、敵を誘い、川を渡るを待って撃ち、浮足立つところを追いくずすがようござる。われよりかかるは危のうござる」
と、元親は反対し、存保もこれに同意したが、権兵衛はきかない。
「貴殿らが同意なくば、われら一人で渡り申す」
と、その隊二千人をひきいて川を渡ってしまった。
しかたがない。元親隊も存保隊も渡った。
薩摩勢は岸の竹藪の中に埋伏して、これを待っていたのだ。一斉に起ち上って、猛烈な攻撃に出た。

ついに四国勢惨敗、十河存保は戦死、元親の嫡子信親も、元親の老臣桑名太郎左衛門も戦死、元親は辛うじて伊予の日振島に退却した。

これを戸次川の戦いといい、秀吉の九州征伐先発豊後口軍はここに瓦解したのである。この不首尾はひとえに権兵衛さんが勇に誇って慎重を欠いたためなのであるが、その権兵衛さんは所領の讃岐の高松まで逃げた。

秀吉は怒って、所領十万石を没収し、勘当した。権兵衛は謹慎の意を表して高野山に入っていたが、三年の後、秀吉が小田原征伐を起すと、旧臣らをひきいて無断で従軍した。朱の大きな丸を紋に打った白練（一説紙子）の陣羽織を着、紺地に「無」の字を白く抜いた馬じるしを真先におし立て、馬上に傲然としてそりくり返って行く姿が、まことに勇壮で、まことに濶達で、九州陣の時の失敗など屁とも思っていない風情であった。

これが秀吉の気に入って、勘気をゆるした上、戦後、信州小諸で五万石をあたえた。

権兵衛の話として、世に最も知られているのは、伏見城で石川五右衛門を捕えたことで、芝居や小説などによく脚色されているが、これは彼の四十半ば頃のことである。生涯壮士の気分を失わなかった人といえるであろう。

しかし、彼は剛強一てんばりの荒武者のようでありながら、世渡りにはぬけ目がない。秀吉が死ぬとさっさと家康に乗りかえ、大いに徳川家のために働いている。関ヶ原役の時には秀忠に従って中山道を上り、信州上田で真田昌幸に食いとめられ、秀忠は関ヶ原戦に間に合わなかった。家康は大へんな不機嫌であった。権兵衛は秀忠のために大いに弁解して、家康のきげんをとりむすび、同時に秀忠の心を攬った。全くうまいものである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

こんなわけで、豊臣氏がほろんでも、仙石家は安泰で、小諸から同国上田に移り、さらに但馬の出石に移され、この騒動の頃には五万八千余石であった。

二

文政七年の夏、江戸屋敷から、出石に急報がとどいた。

「殿様ご危篤」

という知らせである。

殿様とは十代目の仙石美濃守政美のことである。

重臣らは色を失い、大急ぎで集まって、あとつぎの相談にかかった。政美には娘の子は二人もいたが、男の子はいなかったのである。

政美には弟が多数あったが、のこっているのは二人しかなかった。しかし、その一人は奥州白河の城主阿部家に養子に行き、すでに家をついで能登守（名前不明）に任官しているから、問題にならない。一人は妾腹の子で、道之助といい、この時出石にいた。年は数え年五つであった。

当然のこととして、老臣らは、

「道之助様こそ立たるべきである」

と主張したが、首席家老の仙石左京久寿がこう言った。左京の名久寿は、左京の弟久健の子孫で名古屋市在住の土岐英夫氏よ　借覧の系図によった。諸書にはしるすところがないのである。

「筋目から申せば、そうあるべきでござるが、お公儀がそれを許して下さるかどうか、拙者は不

安なのでござる」

左京は仙石家の一族で臣列に下っている家の生まれで、身代は千五百石、年は三十八であった。左京の本家との続柄は、土岐英夫氏の家に伝わる系図によると、初代権兵衛秀久の長男久忠から出ている。久忠が盲目になったので、家をつぐことが出来なかったというのだ。仙石家では最も貴重される一門であったのだ。

「しかし、筋目でござるぞ」

と、老臣の一人が言うと、左京は言う。

「筋目はわかっている。およそ家の継統は筋目を第一とすべきは、天下の公理でござる。しかしながら、大名の家の家督相続は、公儀の許可がいただけるかどうかが第一のことでござる。道之助様は殿様のまさしきおん弟君ではおわすが、ご妾腹であり、またやっと数え年五つというおん幼さでござる。公儀のお許しをいただくは、相当骨がおれるのではないかと、拙者は心配なのでござる」

「そう言われればそうでござるなあ」

と、老臣らは嘆息をついた。

伊達騒動篇でも書いたが、伊達家の老臣らが綱宗のあとつぎとして、わずか二歳の亀千代丸を立てたいと嘆願した時、老中酒井忠清は、亀千代はあまりに幼い、政宗の血統で十七歳以上の者を立てるよう願い直せと言って一旦ははねつけている。あまり幼くては、子であっても、幕府はよろこばないのである。まして、道之助は父の妾腹の子で、弟である。

いろいろと、話が出た末、左京は、

「ともかくも、ことは急を要する。拙者が江戸に出て、ご隠居ともご相談し、ご一族方にも頼み申した上、道之助様を許していただくようしかるべく働きましょう」

と、言い出した。隠居というのは先代の播磨守久道で、当時五十三、まだ健在だったのである。

ほかに手はない。同意せざるを得ない。

「それではそうしていただきましょうか。遠路のところ、ことには炎暑のみぎり、ご苦労でござる」

と、皆言った。

このように相談がもつれたのは、もう政美は死んでいるのを、重態ということにして時をかせぎ、その間に急養子を立てようという場合であったからではなかったかと思う。

左京は出石を出発、江戸に向った。老臣らはこれを見送りに出たのだが、左京がせがれの小太郎を同道しているのを見て、おどろいた。小太郎はやっと数え年十になる少年である。

「可愛くて、片時も側を離して置けないのでござるよ。これもまた江戸というところへ行ってみたいと申すので。ハハ」

と、左京は笑いながら説明したが、老臣らはなにか異様であるという感じからぬけることが出来なかった。

左京一行は出石を去り、老臣らは城内に帰ったが、どうにも不安の感がしてならない。談合がはじまる。

「左京殿が子息を連れて参られたのを、どうお考えなさる？」

「されば、拙者も奇妙に思っています」

「左京殿はご隠居のお気に入りでござる。あるいは、ゆゆしい大望を抱いていなさるのかも知れませんぞ」
「そのこと」
期せずして、老臣らの胸中に生じた疑惑は、――つまり、左京はかねて自分を気に入ってくれるご隠居久道にうまく取入り、自分の子の小太郎を仙石家のあとつぎにする野望を抱いて江戸へ行くのではないかということ。
「万一にもさようなこととなっては一大事。油断はなりませんぞ」
熟議して、きまったのは、一刻も早く道之助様を江戸にお連れして、公儀からご養子の許可をもらい受けることにしなければならないが、その以前に左京の画策が成功して小太郎がご養子に立つようなことがあっては取返しはつかない。左京の運動が成功しないように邪魔をすることが必要だということであった。
そこで、老臣の一人酒匂清兵衛（系図によれば、左京の姉の夫である）という者が選ばれて、翌日――つまり、左京出発の翌日だ、出石を立って江戸に向った。
この時の老臣とは、荒木玄蕃、仙石主計、原市郎右衛門、酒匂清兵衛の四人であった。
四人がこんな談合をし、こんな結論を出し、こんな方法に出たのは、血統論以外の理由があったのかも知れない。つまり、仙石家の一門で首席家老である上に、千五百石という知行を持って、家中第一の権勢家となっている左京を、かねてから嫉ましく思っていたので、もしその子が藩主となるようなことがあっては、左京は上通り（主人なみ）となるわけと、恐ろしく不安になったのかも知れない。

ともかくも、酒匂清兵衛は急ぎに急ぎ、途中で左京を追いこして、江戸に到着したが、すぐ仙石家の分家である旗本らを訪問した。それは四軒ある。それぞれ、当主に会って、言った。

「両三日の中に、左京が着府いたしますが、しかじかの理由で、その心底まことにいぶかしいものがあります。その心して、その申すことをお聞きとり下さいますように」

左京はそんなこととは知らない。江戸へつくと、隠居の播磨守久道に目通りし、小太郎を目見えさせたりなどした。

左京のこの時の行動については、くわしく書いたものは全然ないが、後に幕府の裁判になった時、幕府は、この時左京が小太郎を連れて出府して、全藩を疑惑させたことを罪状の一つにしている。これから察するに、この時の左京の行動は相当含みの多いものであったに相違ない。多分真綿で首をしめるように、じりじりと本望にむかって進みつつあったのであろう。

ところが、間もなく、左京にとっては思いもかけずだ、道之助が国許から出て来たのである。こうなれば、なんといっても首席家老なのだから、左京も道之助のために努力しなければならない。また、酒匂清兵衛の前もっての運動もあったこととて、道之助は七月十三日には兄の養子となることが許可された。つづいて、当主の死が届けられ、閏八月六日、家督相違なく相続を仰せつけられた。

ここまでのところは、老臣側の勝利だ。左京の野心を封じこめ、道之助を十一代の主とすることが出来たのだ。手ぎわとほめてよかろう。

しかし、これからはとんといけない。見事に左京にしてやられるのである。

三

道之助は仙石家の当主になったが、数え年五歳の幼児だ。実権は先々代であり、道之助にとっては実父である播磨守久道にある。左京はこの隠居のお気に入りであり、首席家老だ。江戸藩邸における実権が久道にあるとすれば、国許における実権は左京にあった。

左京は四人の老臣らを怨み、復讐を決心した。彼は先ず家中の者を物色して、さかんに味方をつくった。岩田静馬、山村貢、宇野甚助の三人は、最も左京が頼りにした党与であるが、これは老臣級の者で、その以下の者もまた実に多数あった。

反対党であった老臣らにたいする復讐は、こんな風にして行われた。

仙石主計（かずえ）は勝手がかりの年寄としての手腕がないとの理由で、役儀ごめんになって、政務の座から去った。

幕府の裁判になった時、仙石家から幕府に差出した主計等についての目安書が「手続書」という名目でのこっているが、その中にこうある。

仙石家も財政困難で、文政十年にはとりわけひどく、どうすることも出来ないので、家中の者共の扶持米として所蔵していた米も全部売りはらったが、江戸屋敷の費用は言うまでもなく、家中の者へ渡すべき米もない。扶持の方は、その年の収納米をあてにして、青田のうちに一人一人扶持高の七分だけ、百姓から受取ることにしてすませたが、他の融通がつかない。その財政の局に当時あたっていたのが、仙石主計だ。彼は左京に相役の者をつけてほしいと要求したが、左京

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton